

明治後期のレジャー・レクリエーション雑誌の編輯局について  
～『遊樂雑誌』創刊から廃刊に至るまでの経過～

三橋正幸 [ 公益財団法人神奈川県体育協会 ]

はじめに

レジャー・レクリエーションの歴史を振り返るとき、参考文献として取り上げられる代表的な機関誌に『厚生日本』や『月刊レクリエーション』がある。これらの機関誌は、昭和の時代を映し出す貴重な手がかりとして重宝されてきたが、団体の機関誌としてではなくて発行された、レジャー・レクリエーション関係の雑誌にはどのようなものがあったのか、時代を遡ってみると、1906（明治39）年3月に近事畫報社から創刊された『遊樂雑誌』の存在に行き着いた。しかし、この『遊樂雑誌』は非常に短命で、第一巻第三号をもって廃刊になった、いわゆる三号雑誌であったこともわかった。

本論では、『遊樂雑誌』を創刊した近事畫報社について概観し、どのような事情から廃刊に至ったのかを明らかにするとともに『遊樂雑誌』の特徴の一部を記述することにしたい。

近事畫報社の設立について

教科書や参考書を得意としていた敬業社は、雑誌創刊を目論見、政治家や新聞記者として活躍していた、矢野龍溪を顧問に迎え入れ、1903（明治36）年3月號から雑誌『東洋畫報』を発行し始めた。編輯長には矢野から打診を受けた国木田獨歩が就いたが、雑誌の売上げに欠損が続いたため、すぐに廃刊の方針が打ち出された。それに反対した矢野は自ら、近事畫報社を1903（明治36）年9月に設立し、誌名も『近事畫報』に改めて雑誌を発行し続けた。矢野から聘されて『東洋畫報』編輯長を務めていた国木田獨歩は、矢野と共に籍を近事畫報社に移し、引き続き編輯長として『近事畫報』の創刊に関与した。

日露戦争前後の近事畫報社の経営について

1904（明治37）年2月に開戦した日露戦争は、グラフ誌である『近事畫報』にとって販売部数を見込める千載一遇の出来事でもあった。誌名を『戦時畫報』に変え、絵画主任の小山正太郎、画家の小杉未醒を戦地に派遣し、グラフ誌の面を描かせた。『戦時畫報』は明治期の雑誌としては販売部数が多く、一回に3～4万部売っていたという記録がある。

しかし、1905（明治38）年5月下旬の日本海海戦で、日本の勝利が見えて来た頃から、戦時報道で発行部数を伸ばしてきた『戦時畫報』は売れなくなると、国木田獨歩は予見し、早めに次の一手を講じることになった。近事畫報社には、事業を縮小する選択肢もあったが1905（明治38）年5月から翌年にかけて12誌の雑誌を次々創刊させ拡大路線をとった。

近事畫報社が創刊した12雑誌

『近事畫報』 <small>※戦時畫報から変更</small>	毎月2回	18銭	1905(明治38)年10月～1907(明治40)年	3月
『新古文林』	毎月1回	20銭	1905(明治38)年	5月～1907(明治40)年 3月
『婦人畫報』	毎月1回	25銭	1905(明治38)年	7月～現在に至る
『少年智識畫報』	毎月1回	10銭	1905(明治38)年	9月～1906(明治39)年12月

『少女智識畫報』	毎月1回	10 銭	1905(明治 38)年	9 月～1906(明治 39)年	12 月
『名畫集』	毎月1回	45 銭	1905(明治 38)年	10 月～1906(明治 39)年	5 月
『通俗小説文庫』	毎月1回	35 銭	1906(明治 39)年	1 月～1906(明治 39)年	3 月
『美觀畫報』	毎月1回	25 銭	1906(明治 39)年	1 月～1906(明治 39)年	4 月
『實業畫報』	毎月1回	25 銭	1906(明治 39)年	2 月～1906(明治 39)年	6 月
『支那奇談集』	毎月1回	35 銭	1906(明治 39)年	2 月～1906(明治 39)年	5 月
『繪入史談』	毎月1回	35 銭	1906(明治 39)年	2 月～1906(明治 39)年	6 月
『遊樂雜誌』	毎月1回	25 銭	1906(明治 39)年	3 月～1906(明治 39)年	5 月

### 各雑誌編輯担当者について

近事畫報社で編輯者として働き、執筆者の一人でもあった坂本紅蓮洞(本名:易徳)は、1908(明治 41)年 6 月 23 日に没した、国木田獨歩を回想する特集を組んだ『趣味』(1908(明治 41)年 8 月號)の中に、各雑誌の編輯担当者名を書き記している。

今其の當時、社から發刊する定期刊行物のことをいふに、近事畫報は月三回の發刊で、従前の如く故人野外二人の擔任で、婦人畫報は枝元枝風、新古文林は吉本孤雁、遊樂雜誌は平塚篤、實業畫報は茅原綠、富源案内は佐藤青矜、少年智識畫報は石井研堂、少女智識畫報は海賀變哲、名画集と其他諸雑誌の遊撃軍として鷹見思水、美觀畫報は小生一無論、此くなるまでに、種々の變遷があつたのだが其の極度をいへば此んな有様で、如上の諸氏部署を定めて各其の編輯を担当するものゝ、故人は獨り自ら編輯する近事畫報のみならず、社の編輯長として此等諸雑誌の何れにも頭を廻らせねばならぬ。のみならず、此の他にも出版物がある。故人亦これに関はらねばならぬ。故人の多忙思ふべきである。此の時代の故人は詩人文士にあらず、全く事務の人であった。(引用『趣味』近事畫報社時代の獨歩(1908(明治 41)年 8 月號))

この回想録からは、近事畫報社が発行する雑誌すべてに、国木田獨歩が関与していた様子も確認できる。野外とは、杉浦野外のことで、グラフ誌を得意としていた人物である。

### 近事畫報社が創刊した『遊樂雜誌』について

12 誌の中で一番最後に創刊されたのが、『遊樂雜誌』であった。発行部数は不明である。

『遊樂雜誌』編輯担当者は前述、坂本の記録から平塚篤であることもわかった。国木田獨歩は、新聞『民声新報』編輯長を務めていた時に平塚篤と知り合い、矢野龍溪も 1905(明治 38)年 3 月に、平塚篤と新雑誌の企画話をすすめていたという記録が残されている。この頃から近事畫報社に籍をおき、編輯局の業務に携わり始めた人物ではないかと思われる。奥付には、次のような記録がある。

編輯者 東京市京橋區五郎兵衛町廿一番地 大賀順治  
 發行所 東京市京橋區五郎兵衛町廿一番地 株式会社近事畫報社 代表者 永田一茂  
 印刷所 東京市神田區錦町三丁目一番地 小川印刷所

編輯者は大賀順治となっていたが、平塚篤が編輯担当者で、国木田獨歩は社の編輯長として『遊樂雜誌』の発行責任者的立場にあつたと、坂本の記録からは読み取れる。



## 『遊樂雜誌』編輯局について

近事畫報社の所在地は上記奥付のとおり、東京市京橋區五郎兵衛町におかれていたが、『遊樂雜誌』最終號となった第一卷第三號に、次のような移轉社告が掲載されている。

### 移轉

都合に依り左記に移轉隨て電話番号も變更いたし候

東京市京橋區五郎兵衛町廿一番地

遊樂雜誌編輯局 電話本局三二四三番

自社所在地への移轉社告という不思議さから『遊樂雜誌』編輯局の所在地を探求してみたところ、社告からその所在地が明らかになった。

『遊樂雜誌』は、第一號から第三號まで、すべてに同じ次のような社告を掲載している。

『運動遊戯に熱心なる遊樂雜誌愛讀者諸君に乞う 本誌は滿紙を擧げて諸君の爲めに開放せん！！諸君は此の我國唯一の遊樂園を自由に濶歩するの權利を有す』の大見出しがまざる。そして、『遊樂雜誌』の編輯方針でもあったのだろう、『各地方の運動界實況、競技批評及び新遊戯の方法、地方特殊の遊戯等は殊に諸君の寄稿を希望す め切は毎月二十日とす』と、読者からの寄稿を呼びかけるための、寄稿規程を毎號載せていた。

その寄稿先が「東京市芝區兼房町四番地 遊樂雜誌編輯所」であった。この東京市芝區兼房町四番地は、近事畫報社の編輯長である国木田獨歩の自宅であり、一階が自宅、二階を編輯所として使っていたことがわかった。国木田獨歩の自宅は、『東洋畫報』編輯長を引き受けた、敬業社時代から同じスタイルで、編輯局を兼ねていたこともわかった。

闘球がお気に入りだった獨歩は、編輯局に闘球盤を置き、局員とともに楽しんでいたという記録が残されている。『遊樂雜誌』第二號には国木田獨歩自らが、闘球談として、家族と共に竹芝館で晚餐をとった時に、女中から闘球を教わり、早速その販売所を聞いて闘球盤を購入し、編輯局に置いたところ局員から歓迎されたというエピソードを書いている。

国木田獨歩が編輯局で『遊樂雜誌』にどのくらい関わっていたのか、質的にはよくわからないが、近事畫報社は營業部、繪畫部、編輯局で構成された組織であったようである。

## 『遊樂雜誌』が取り上げた諸活動

創刊號（第一卷第一號）に掲載された發刊の辭は、次のように書かれている。

勞作ありて生活あり、而も遊樂なきの勞作は精神の消耗たらずんばあらず。王侯と庶人とを問わず、男子と婦人と老と若とを問わず、一日の生活中、多少の遊樂を享有する能はざる人は不幸なり。人は遊樂の爲めに活くるには非ずと雖も、又同時に人は謔面して泣面して生活せねばならぬ義務もなきが如し。以て本誌發刊の辭となす。

『遊樂雜誌』は日露戦争後の庶民の生活を案じていたのか、この發刊の辭を具現化させるがごとく、毎號多岐にわたる種目を取り上げている。特に、野球、庭球、闘球、音樂、座敷藝、活花、歐州の運動遊戯界は、すべての號に、テーマとして取り上げられていた。

読者に遊樂の選択肢を幅広く提供することを考えたと思われる、編輯局の熱心さは目次（次ページ）の内容の豊富さからも伝わってくる。毎號 288 ページにもわたる情報量の記事を集め、編輯する編輯者の作業の労苦は計り知れないものであったと想像できる。

『遊樂雑誌』第一卷第一號 目次

※( )内はページ数

野球 (2)、歌留多 (40)、釣 (57)、蹴球 (70)、弓術 (89)、鬪球 (100)、音楽 (116)、能 (128)、お座敷藝 (147)、庭球 (168)、書畫道楽 (194)、體操 (207)、歐州の運動界 (212)、運動界近事 (225)、圍碁 (228)、活花 (236)、將碁 (251)、玉突 (253)、端艇界 (267)、新遊戯 (274)、芝居 (285)

『遊樂雑誌』第一卷第二號 目次

歐州の運動遊戯界 (1)、圍碁 (33)、釣と網 (47)、野外遊戯 (64)、庭球 (86)、植物採集 (101)、寫生 (108)、端艇 (124)、音楽 (149)、歌留多 (155)、野球 (164)、鬪球 (212)、弓術 (216)、玉突 (236)、座敷藝 (245)、活花 (256)、運動界近事 (281)

『遊樂雑誌』第一卷第三號 目次

東西両京大学庭球競技 (1)、圍碁 (33)、活花 (55)、茶道 (67)、釣界案内 (79)、歐州の運動遊戯界 (一) (93)、花牌 (109)、芝居 (129)、登山 (132)、寫生 (145)、座敷藝 (151)、運動界近事 (157)、自轉車 (165)、運動 (177)、音楽 (183)、端艇 (193)、角力 (217)、鬪球 (227)、野球 (231)、弓 (238)、歐州の運動遊戯界 (二) (253) ※各號は目次、口繪寫真、広告を除くと 288 頁構成であった。

獨歩社の設立と『遊樂雑誌』廃刊について

次々に雑誌を創刊した近事畫報社の収益は、思惑とは逆に、悪化していった。矢野龍溪はこの状況から雑誌事業に見切りをつけたが、国木田獨歩はそれに反発し、今度は獨歩自らが、獨歩社なる出版社を 1906 (明治 39) 年 6 月に設立した。獨歩社は、近事畫報社から金銭の負債と今後採算が見込めそうな『近事畫報』『新古文林』『婦人畫報』『少年智識畫報』『少女智識畫報』の 5 誌を引き継いだ、『遊樂雑誌』を含む、その他の雑誌は獨歩社の設立を機に、相次ぎ廃刊とされた。さらに、設立当初から負債を抱えていた獨歩社は、債権者から訴訟を起こされ、1907 (明治 40) 年 4 月に、破産に追い込まれ解散した。

まとめ

レジャーを「選択の自由性が高く、内発的な動機によって引き起こされる諸活動」と捉えたとき、『遊樂雑誌』は読者の「選択の自由性」を高め、読者自身の「内発的な動機」を掘り起こそうとした内容で編輯された、レジャー雑誌であったと特徴づけられよう。

編輯者としての国木田獨歩の軌跡を追うことで『遊樂雑誌』の創刊から廃刊に至るまでの事情を明らかにすることができた。編輯局と営業部門は当初から独立し、雑誌の編輯は編輯長であった国木田獨歩にかなりの権限が委ねられていた様子も認められた。

本稿を通して、一般的には小説家として名声の高い国木田獨歩が、明治後期のレジャー雑誌としての特徴を持った『遊樂雑誌』創刊に関与していたことも明らかになった。

今後は、国木田獨歩に近い人脈の中に、我が国のスポーツ倶楽部の黎明期を支えた「天狗倶楽部」「ポプラ倶楽部」を結成した中心人物が多数いることにも着目し『遊樂雑誌』を、さらに深く読み解いてみたい。国木田獨歩が、レジャー・レクリエーションに関わりの深い、新たな歴史上の人物の出現として受け止められる日が来ることも期待しておきたい。

【引用・参考文献】

『遊樂雑誌』 第一卷第一號～第一卷第三號 近事畫報社、1906.3～1906.5

『趣味』 第三卷第八號 易風社、1908.8

『編集者国木田獨歩の時代』 黒岩比佐子 角川選書、2007.12